

2 - 1 - 6 三光寺菩提樹・多羅葉

(解説)

三光寺は江戸時代の明暦3年(1657)に創建された由緒ある寺である。この本堂の東・西に、菩提樹と多羅葉が植えられている。この2本の木は、創建以前に、この地を聖地とするために植えられたものといわれる。

菩提樹と多羅葉が聖地に植えられたことには、大きな意味があった。

菩提樹は、釈迦がその樹の下で悟りを開いたとして仏教の聖木とされている。実際には、釈迦が悟りを開いたのはイヌビワ(クワ科)の仲間のインドボダイジュであるが、葉の形が似ていることから、中国でも日本でも聖地に植える樹木として、大切にされてきた。なお、菩提樹は、樹高が10メートルほどになる落葉性の高木である。

目通周囲 1.43メートル

高 さ 9.68メートル

一方、多羅葉は、インドで葉に仏の教えを書いたといわれる貝多羅樹になぞらえて、聖地に植えるのにふさわしい樹木とされた。その葉は、厚くて大きく、長さ10~17センチ、幅4~7センチにもなる。葉の裏に細い棒を使って絵や文字を書くと、その部分が黒く浮き上がってくるので、エカキシバ、ジカキシバという別名もある。

多羅葉は、高さ20メートル、幹の直径60センチにもなる常緑高木である。

目通周囲 1.83メートル

高 さ 13.72メートル

山県市教育委員会

説明板より